地域資源を活用したサステナブルな服飾造形
―アートニット「帰森」シリーズを事例として―

Sustainable Clothing Design　Using Regional　Resources
-A Case Study of the Art Knit "Kishin:Return to the Nature" Series-

浅田陽子[1]　水谷由美子[2]

ASADA Yoko[1]　MIZUTANI Yumiko[2]

要旨:当研究は2011年から山口県立大学企画デザイン研究室が着手した、山口市徳地地域の中山間地域活性化プロジェクトの一環として開始した。

徳地地域は豊かな自然（森林）に恵まれ、清流「佐波川」の上流として古くから紙漉きの文化が継承されて来た。この貴重な地域資源である徳地手漉き和紙に着目し、植物素材のニットを融合させた服飾造形作品を創作し、「自然回帰」のメッセージと共にファッションショーや展覧会などで発表する事により、徳地手漉き和紙の新たな可能性を図った。

また2021年にこのシリーズの集大成として開催したアートニット展の会場となったのは、この「佐波川」の下流に位置する防府市の周防国分寺である。

山口市と防府市、両市の地域資源を融合させた展覧会（インスタレーション）を通して、双方の文化交流が創出された経緯と結果を報告するものである。

Abstract: This research was initiated by the Planning and Design Laboratory of Yamaguchi Prefectural University in 2011 as part of a project to revitalize a mountainous area in the Tokuji region of Yamaguchi City

The Tokuji area is blessed with rich nature (forests), and the culture of papermaking has been passed down from generation to generation in the upper reaches of the pure "Saba River. Focusing on this precious regional resource, the company created clothing using knit art works that fuse plant material with natural knit materials, and presented them at fashion shows and exhibitions with the message of "Return to Nature," thereby exploring new possibilities for Tokuji handmade paper

In 2021, the compilation of this series of exhibitions was held at the Suo Kokubunji Temple in Hofu City, downstream from the Saba River, where the Knit Art Exhibition was held

This report describes the process and the results of the creation of cultural exchange between Yamaguchi City and Hofu City through an exhibition whose method is Installation, that fuses the regional resources between the two cities.

[1]　山口ファッション&テキスタイル研究所研究員　Researcher of Yamaguchi Fashion & Textile Institute
[2]　山口県立大学名誉教授　Emerita Professor of Yamaguchi Prefectural University

キーワード（日本語）：
地域資源　手漉き和紙　中山間地域活性化　周防国分寺　文化財　服飾造形　空間デザイン
アートニット　野外展覧会

Keywords:
Regional Resources, Japanese Handmade-paper, Revitalization of Mountainous Areas, Suo Kokubunji Temple, Cultural Property, Clothing Design, Spatial Design, Art Knit, Outdoor Installation

はじめに

当研究は2011年から山口県立大学企画デザイン研究室が着手した、山口市徳地地域の中山間地域活性化プロジェクトの中のひとつとして開始された[注1]。

徳地地域は豊かな自然（森林）に恵まれ、清流「佐波川」（写真1）の上流として古くから紙漉きの文化が継承されていた[注2]。そこでこのプロジェクトメンバーの1人であり、アートニット作家の淺田陽子（当時山口県立大大学院1年）（以下、淺田と記す）はこの貴重な地域資源である徳地手漉き和紙（以下、徳地和紙と記す）に着目し、淺田の専門分野であるニットと徳地和紙を融合させた研究に焦点を絞り創作が始められた。

2011年と言えば3月11日に起こった東日本大震災が今でも鮮明に思い出されるが、その震災を契機に「自然と人間との調和」という人生観が急速に重視されてきた頃である[注3]。そこで淺田は「自然を敬い自然に寄り添って生きる」という人間本来のライフスタイル「自然回帰」を主なテーマに掲げ、徳地和紙をアートへと昇華させたサステナブルな服飾造形作品をファッションショーや展覧会で発表し続ける事により、徳地和紙の新たな可能性を探った。

先ず1章ではこの作品群のタイトル「帰森（きしん）」（以下、「帰森」と記す）シリーズの全作品画像とその解説を記載している（写真2 - 18）。「帰森」とは、人々が温もりを求めて帰郷するように森へ帰っていく、という意味の造語で「自然回帰」や「魂の再生」を立体で表現し服飾に落とし込んだ極めて独創的なニットアートで、作品は全て土に戻ってゆくもの、つまり徳地和紙や、植物由来の編地素材などで構成されたサステナブルなものである。

2章では、淺田が当研究に着手するまでの主な背景（アイディアソース）を3方面から解説している。その1つ目は大学院入学前の創作活動について、2つ目は2011年、淺田が山口県立大学大学院入学後に訪れたフィンランド研修から学んだ「人々と自然との向き合い方」について、3つ目は2011年夏に受講した毛利臣男の特別デザイン実習から着想を得て独自に展開させた特殊技法である。

3章では、淺田がそれらを活用して発表した徳地和紙の普及活動を年代順に記し、大学院修了後も企画デザイン研究室と関わり続けて徳地地域の活性化を図った経緯を辿っている。

そして最後の4章では、2021年にこのシリーズの集大成として開催した野外展覧会「KISHIN Artknit Exhibition in 周防国分寺」の概要や結果、及びその他の成果を述べている。この展覧会の会場となったのは、「佐波川」の下流に位置する防府市の周防国分寺である。山口市と防府市、両市の誇る地域資源と文化遺産を融合させた展覧会を通して両市の「文化交流の創出」を図った記録を報告する。

以下の本論ではこの創作研究を担当した淺田が執筆したものであることを記しておく。

1.「佐波川」上流域

1.「帰森」シリーズ作品の画像と解説

この章で記載した「帰森Ⅰ～Ⅳ」までの作品の詳細は、前掲書『山口県立大学学術情報　第6号　大学院論集』山口県立大学、2013年[注4]に記されているのでそちらを参考されたい。

以下では、2013年以降に制作した「帰森Ⅶ～春～」と「帰森Ⅷ～宙へ～」に関してのみ、作品の詳細や背景の解説を述べている。またこの作品ページに掲載している画像は制作年順ではない。ページの余白には各作品の「タイトル名」と共に、「イメージソース」「素材」「主な発表場所」「コンセプト」を添付している。

(1)「帰森Ⅶ～春～」

この作品は「帰森Ⅳ」の幼児用の作品2点を、更に完成度を高めてレディス用として仕上げたものである。この作品以降、徳地和紙は山口県立大学大学院水谷由美子教授（現在、同大学名誉教授、以下水谷教授と記す）の下で商品化された強度の極めて高い和紙「十文字漉き和紙」を使用しており、更に緻密な技法を試行している。

例えば和紙の裁断はハサミを使用せず、微小の炎（線香）で焼き切る事により、自然界に存在する不規則な形状を再現している。また縫製が可能なため、後ろ身頃中央の柄に沿って襟下がりからウエストラインまでに切り込みを入れて見返しを付けマジックテープで固定できる。従って後ろあきのレディースウエアーとして着脱は容易にでき、ファッションショーに於いても活用できるように様々な所で工夫を凝らしている。

(2)「帰森Ⅷ～宙へ～」

この作品の制作年は2020年。世界的パンデミックに見舞われた日本でも、予定されていた展覧会やイベントの全てが延期、又は中止となった。これまであたり前のように過ごしていた暮らしの未来が見えず、特にアーティスト達の生活は一転した。

しかし日が経つにつれて各々が出来る事、例えばインターネット等を活用して自らの作品を発表する人々が急増した事は鮮明に記憶されている。特に筆者が心打たれたシーンは、医療従事者への感謝を込めてエールを送り続けた音楽家達の演奏映像であった。

そこで外出の自粛が呼びかけられる中、モノづくりに携わる作家として出来る事は何か、それはただひたすら自身が創作し続けてきたメッセージ、「自然回帰」を最後まで人々に伝える事であると痛感した。そして取り組んだ作品が「帰森Ⅷ～宙へ～」であった。

この作品は、日本を代表する生命科学者にして歌人である、柳澤桂子の名著『生きて死ぬ智慧』[注5]から感銘を受け、膨大な時間を費やして作品の完成までに至った当シリーズ最後の渾身の作品である。

2.「帰森Ⅷ～宙へ～」

3.「帰森Ⅷ～宙へ～」

4.「帰森Ⅷ～宙へ～」Back

タイトル:《帰森Ⅷ～宙へ～》　**イメージソース:**万物は宙（そら）へと続く
素材:徳地手漉き和紙（十文字漉き和紙）、ニット（綿、麻、他）、木綿布（シーチング他）、ワイヤー
主な発表場所:
2021年4月、5月「KISHIN Artknit Exhibition」（於:防府市周防国分寺）
コンセプト:
万物は宇宙の粒子のひとつであり宇宙とひとつづきである、
奇しくも世界中がコロナ禍で混沌（chaos）と化した2020年3月から制作を開始し2021年4月に完成。

5.「帰森Ⅲ」Front

6.「帰森Ⅲ」

7.「帰森Ⅲ」Image Source

タイトル:《帰森Ⅲ》**イメージソース:**巨樹
素材:徳地手漉き和紙（各種）、ニット（綿、オーガニックコットン、麻）、木綿布（裏地）
主な発表場所:
2012年8月 「国際服飾学術会議『Art - To - Wear Exhibition』」（於:台湾 高雄市 國立科学工藝博物館）
コンセプト:
森に立つ巨樹をイメージしてデザインした。地底から湧き上がる様な力強さと、巨樹の持つ静けさを表現している。
周防国分寺の秘宝「日光菩薩月光菩薩像」からもインスパイヤされた服飾造形作品。

8.「帰森Ⅰ.Ⅱ」Image

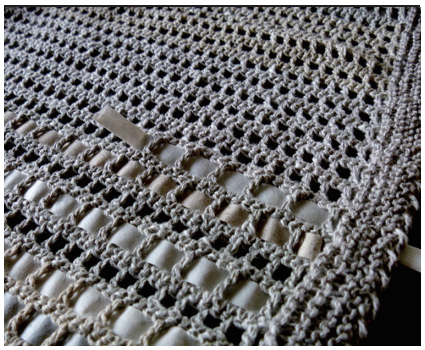
9.「帰森Ⅰ」Fashion Show

10.「帰森Ⅰ.Ⅱ」

タイトル:《帰森Ⅰ・Ⅱ》　**イメージソース:**冬の森
素材:徳地手漉き和紙（各種）、ニット（綿、麻）、ポリエステル（裏地接着芯）
主な発表場所:
2011年12月「Xmas Fashion Show vol.8『Trip in YAMAGUCHI 2011』」（於:山口県立大学桜圃会館）
2013年1月「山口県立大学大学院修士制作展」（於:山口市クリエーティブスペース赤れんが）
コンセプト:
皺加工させた和紙で枯れ枝に積もった雪を表現した。和紙とニットの融合に違和感はないか、素材の選択は適切か、技法的に最適か否かを試行錯誤して完成させた「帰森」シリーズ最初の作品2点である。

11.「帰森Ⅳ」（上）
12.「帰森Ⅳ」（右）
13.「帰森」ロゴ（下）

タイトル:《帰森Ⅳ》　**イメージソース**:森に棲む精霊
素材:徳地手漉き和紙（揉み和紙、他）、ニット（綿、麻）、ワイヤー
主な発表場所:
2012年9月「CSK13ファッションショー『徳地 COLORS』」（於:山口市徳地総合支所 特設ステージ）
2014年12月「Christmas Creation 2014『Tokuji Washi Exhibition』」（於:山口県立美術館）
コンセプト:
フィンランドの森に棲むといわれている精霊をイメージしている。仏教で例えるならば、あの世とこの世を自在に行き来する「飛天」。子供用（10歳前後）の2点の軽やかな造形作品に仕上げた。



14.「帰森Ⅴ・Ⅵ」Parts（上）
15.「帰森Ⅴ・Ⅵ」Skirt（下）
16.「帰森Ⅴ・Ⅵ」（右の右・左）

タイトル:《帰森Ⅴ・Ⅵ》　（Ⅴ スカート、Ⅵ パンツルック）　**イメージソース:**朝の森
素材:徳地手漉き和紙（染め和紙、他）、ニット（オーガニックコットン、海島綿、ベルギーラミー、他）
主な発表場所:
2012年12月「Xmas Fashion Show 2012」（於:山口県立大学桜圃講堂）
2013年1月「山口県立大学大学院修士制作展」（於:山口市クリエーティブスペース赤れんが）
コンセプト:
朝の森の静謐な時間をシンプルなシルエットに凝縮させた作品。方眼に編んだ編地に様々な和紙を挟み込んで形成している。凹凸のある人体を四角い編地で覆う事により発生する自然のドレープが特徴。

17.「帰森Ⅶ～春～」（左）
Front

18.「帰森Ⅶ～春～」（下）
Back

タイトル:《帰森Ⅶ～春～》　イメージソース:春の森の樹々の芽吹き
素材:徳地手漉き和紙（十文字漉き和紙）、ニット（綿、麻、他）、木綿布（シーチング、他）、ワイヤー
主な発表場所:
2021年4月、5月「KISHIN Artknit Exhibition in 周防国分寺」（於:防府市周防国分寺）
2022年5月「2022年度 国際服飾学会大会特別企画作品展示『日はまた昇る～自然回帰～』」
KDDI 維新ホール2階会議室（山口市）
コンセプト:
春の森の旺盛な生命力を表現した服飾造形作品。木々の芽吹きやぐんぐんと延びてゆく枝々の、躍動的で若々しい様をミディ―丈のドレスにまとめた。

2.「帰森」の背景とアイディアソース

（1）ニットアート

ニット（編物）といえばほとんどの人が手編みのセーターや手袋やマフラー、または機械で大量生産された商品を想像するであろう。このような中、アート作品としてのニットの位置は極めて低く、美術館でのコレクションでも見過ごされる傾向があった。その理由は、編物は本来「女性の仕事」として位置づけられてきたから、とも言われている。

しかしここ数年間で人々のニットに対する見解が変化し新たな可能性が見出され、テキスタイル研究やアート素材として注目されるようになった。ニットという技法が平面･立体表現のどちらにも無限の可能性を秘めていることが認知されてきたのである。ここでニットアートの現状を少し述べておこう。

2001年にルーブル美術館で行われたテキスタイル展「ジュエ・ラ・ルミエール　(光を遊ぶ)」のニット部門の序文では「･･･（略）美術館ではほとんど理解されることがなく、テキスタイル史研究者の間では誤解されていた編物が、現在では主要な役割を担うようになり、驚くほどの多様な可能性を持つものとして姿を現し始めた」と記されていた。

また最近では、「服を現代芸術表現の道具として使うことは、芸術的表現の『言語』として日常的でありながら、強力な要素となっている。」とも言われている[注6]。

筆者も自身が手掛けるアートニット展では、「人々の心に訴える作品を創りたい」という思いから販売作品だけではなく、精神世界やメッセージ性を込めたアート作品を発表してきた。それは筆者が、編物の普及と教育を理念として活動を行っていた「一般財団法人 全日本編物教育協会」に所属して編物の技術や可能性を一から学んだ事、またその協会が主催する全国編物コンクールにて身に余る賞を度々頂き、東京の一流ホテルで開催されたニットディナーショーに招待された事が要因の一つと言える。

当時はバブル景気の只中、生まれて初めて見るホテルでのきらびやかなショーに瞠目した。プロのモデル達が美しくライティングされ、各円卓の間を優雅にウオーキングしてゆく幻想的なニットショーは、地方に生れ育った筆者にとっては夢のようなひと時であった。それと同時に全国各地から集結した同協会員とのニット談話に高揚した。この頃から一気に、筆者の作品に芸術性が加味されていった。

当時手掛けていた作品は、自然界の様々な形状（水流、炎、植物、月夜など）をデフォルメし、それらをその時々に抱いた感情（諸行無常、嫉妬、疑惑、癒しなど）をテーマに据え仕上げていた。

技法的には最も高度で精緻な割り出し計算を要すると言われている「求心編み」をさらに独自にアレンジさせ素材は国内外の糸を2本、3本と撚り合わせ、作品のイメージに合う独特の風合いで仕上げた事が、ニット愛好家達の目に留まったと考えられた。

この時、創作の根底を常に流れていたイメージソースは子供の頃から親しんできた近くの「天神山」の自然林や、一級河川の「佐波川」や、自宅に隣接する「周防国分寺境内の大樹（樹齢数百年）などの「自然」であった。地方在住ならではの豊かな環境が、豊かな発想へ繋がり、作品に反映されたと考えられた。

以後、筆者の発表する作品はこのスタンスを保ちつつ、東京、大阪、京都、福岡、松山、山口など全国各地で開催していった。作品は展覧会会場に来場の方々のみならず、編物関係者（編物誌編集など）や別の分野のクリエーターからも高く評価され、その時の叱咤激励が自身の活動継続の力となったと言える。

（2）フィンランドデザイン

2010年、11月、山口市 ギャラリー ラ・セーヌにて開催していたアートニット展に於いて、水谷教授に来場頂き、展覧会会場での設えの一部として使用していた徳地和紙に着目された。そして同大学院にてこの徳地和紙とニットとを融合させた創作研究を勧められた。また現代のものづくりの現場では、エコロジーやサステナブルを重視している事、様々な作家達が様々な形で地域に貢献している事などを紹介された。その時の水谷教授の言葉のひとつひとつが極めて新鮮に筆者の心の中に沁みこみ、その後、山口県立大学大学院への入学を決意した。

翌2011年、4月、同大学院国際文化学研究科に入学。それと同時に水谷教授からの推薦を受けて、国際服飾学会へ学生会員として入会。2011年8月19日から29日まで開催された同学会のフィンランド研修に参加した。

その研修ではロヴァニエミ市にあるラップランド大学にてプレゼンテーションやエキシビションを、首都ヘルシンキにあるヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）ではエキシビションにて自身の作品を多くの人々へアピールする機会を得た。この経験は作家として実に貴重で有難く刺激的であった。また手工芸の村フィスカース、古都トゥルク、そして隣国のエストニアの首都タリン等も視察し、北欧の歴史や自然（夏）を実感し、短い夏を謳歌する人々の自然に寄り添った生き方に触れた。このフィンランド研修は帰国後に手掛けようとしていた研究のイメージソースとして大変有意義な経験であったと言える。

翌年2012年、水谷教授が率いる企画デザイン研究室では11月1日から10日までの期間、フィンランド研修が企画され筆者も再び参加、今回は真冬の北欧であった。この年のヘルシンキはワールドデザインキャピタル[注7]に指定されており、街中が更にアートフルに美しく整えられていた。

このヘルシンキでの滞在では2011年の夏に引き続き、世界的ブランドであるマリメッコ工場を見学した。そこで大量に生産されてゆくテキスタイルデザインは自然界からインスパイヤ―されたモノが多く、テーマも夏と冬で手掛けるものに違いのある事を学んだ。また自由行動では終日一人でヘルシンキ市内を散策。美しい北欧の街並みや歴史的建造物、極夜を楽しむ人々のライフスタイルに直に触れ、冬の過酷な自然と共生してきた民族の美意識や、自国の風土や歴史に「誇り」を持ち、後世の人々に伝えようとするフィンランドの人々の生き方に強く感銘を受けた。

そしてラップランド大学に於ける合同ワークショップでは、様々な国の学生たちがチームを組んでテーマを見つけ出し、それぞれの大学が提供した素材（トナカイの皮、フェルト、徳地和紙、柳井縞織物）を融合させて創作を開始した。我々のチームは自然界、特に「水」の循環に焦点を当ててダイナミックな作品を完成させた。この夏と冬のフィンランド研修での経験は、2021年に開催したインスタレーション[注8]に大きく影響したと考えられた。

（3）モーリマスクダンス

2011年夏のフィンランド研修の帰国後、早速自らの手掛ける創作研究を開始した。先ずはこの研究テーマに相応しいタイトルが重要となった。そこで森（自然）を自らの生活の一部として暮らすフィンランドの人々のライフスタイル「自然との共生」から着想を得たタイトルが「帰森」であった。

このシリーズの創作を開始するにあたり大変重要となったのは、2011年、8月6日から11日まで開催された夏季集中講義の「特別デザイン実習」であった。この夏季研修は水谷教授が東京から招待したアーティスト、毛利臣男と共に企画開催されていた。毛利臣男は空間演出家であり、アートディレクター、また芸術監督、装置や衣裳のデザイナー、として世界的に幅広い分野で活躍しているアーティストであった[注9]。

まず「モーリマスク」と呼ばれる毛利臣男考案の「面」をひとグループ4～5名でコラボレーションを行いつつ作成した後、その面にふさわしい衣裳を制作した。今回の作品のテーマは「喜怒哀楽」で筆者は「怒」の面や衣装を担当した。

このマスクは、徳地の染和紙を用いて各自2つの面を制作した。次にそのマスクに合わせて衣装を制作した。この時に用いた主な素材は、毛利臣男が考案した皺状のシーチングである。それに筆者が独自に考え出した徳地和紙のパーツ、和紙の裏に細いワイヤーを貼り付けて角状に立体感を出したものを組み合わせて激しい怒りを表現した。これは徳地和紙の独特の質感と強度を最大限に活かした形状であった。この工程に於いて皺加工を施した生成りの綿と、和紙との組み合わせに新たな美を見出した。和紙と木綿という全くの異素材でありながら、どちらも植物素材の取り合わせは美しく、互いの特殊な質感を引き立てるという感覚を学んだ。シーチングのパーツを木綿や麻などの植物ゆかりの素材（糸）に置き替える事により、これまでに表現できなかった技法に取り組んだ。

3.徳地和紙の普及活動

（1）2011年～2012年

ここでは、筆者が大学院生として徳地和紙の普及を目的とした主な活動を年代順に記している。「帰森」シリーズはこれらの様々な経験により、地域に根差した拡がりとグローバルな発想と学術的な奥行きが加味されていったと考えられる。

①「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトvol.1『徳地手漉き和紙で豊かに生活を飾ろう―重源の郷 秋の1日ワークショップ―』」2011年10月22日（土）、山口市徳地「重源の郷」（庄屋 白波）。
【主催】山口県立大学企画デザイン研究室 【共催】堀4区まちづくりの会、他【助成】山口県中山間地域元気創出若者活動支援事業、山口市中山間地域資源付加価値創造事業[注10]。

②「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトvol.3『徳地の若手・手工芸作家展と徳地和紙や古布によるワークショップ作品展』プレ・オープニング記念イベント―」2011年12月4日（日）～11日（日）。
【主催】山口県立大学企画デザイン研究室 【共催】堀4区まちづくりの会【後援】徳地観光協会【助成】山口県中山間地域元気創出若者活動支援事業、山口市中山間地域資源付加価値創造事業[注11]。

③「Xmas Fashion Show vol.8 『Trip in YAMAGUCHI』」2011年12月18日（日）、山口県立大学講堂桜圃会館。
【主催】山口県立大学企画デザイン研究室【共催】山口県立大学国際文化学部国際共同研究プロジェクト[注12]。

④第25回 國際服飾學術會議藝術作品展 「International Costume Congress 『Art-to-Wear Exhibition』」2012年8月22日～23日、 台湾 高雄市 國立科学工藝博物館宇宙の星廣場。

⑤「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトvol.5『CSK13 ファッションショー 徳地 COLORS～和紙と私とつながる着物 Reuse ～』」2012年9月1日（土）山口市徳地総合支所特設ステージ[注13]。

【主催】山口県立大学企画デザイン研究室【協力】出雲ふるさとさんさ祭り実行委員会、とくぢ花火大会実行委員会、徳地観光協会、山口県立大学、東亜大学。

⑥「Xmas Fashion Show 2012 」12月9日（日）、山口県立大学桜圃会館

【主催】山口県立大学【企画・運営】国際文化学部文化創造学科【協力】山口日本フィンランド協会、フィンランド国立ラップランド大学、他。

⑦平成24年度山口県立大学大学院国際文化学研究科修了制作展 2013年1月31日（木）～2月3日（日）クリエーティブスペース赤レンガ

【主催】山口県立大学【後援】山口県、山口市。

（3）2013年～2022年

大学院修了後は、「山口ファッション&テキスタイル研究所」（以下、Y-FATIと記す）[注14]を修了生有志らで立ち上げ、徳地手漉き和紙の普及を目的とした展覧会やファッションショー等で「帰森」シリーズの作品を発表した。2013年のY-FATI発足に関しては水谷教授の采配により、筆者がY-FATIの初代所長として展覧会のディレクションなどを担当し、様々なスキルを得る機会を得た。このY-FATIでの発表の場がなければ、「帰森」シリーズ継続への志気は阻喪し、大学院修了と同時に完結していたと考えられる。

①「Christmas Creation 2013 『Finland×Japan』」2013年12月13日（金）～15日（日）、山口県立美術館企画展示室2階。

【主催】山口県立大学【後援】山口県、山口市【協力】山口県立美術館、ロヴァニエミ市、フィンランド国立ラップランド大学、Y-FATI、他。

②「Y-FATI発足1周年記念講演会『美の追求と伝達』」2014年5月26日（月）、山口市民会館小ホール。

【主催】Y-FATI【後援】山口市【助成】山口メセナ倶楽部。

③「Exhibition with 山口とくぢ和紙振興会 結の香『地域の宝もの-徳地手漉き和紙と生活の装い-』展」）[注15]。

2014年12月10日（水）～12月14日（日）、山口県立美術館　企画展示室2階。

【主催】山口県立大学【共催】山口市【後援】山口県。

④「Christmas Creation 2020『YAMAGUCHI×FINLAND+Design Exhibition』」2020年12月11日（金）～15日（火）山口市民会館展示ホール

【主催】クリスマス・フィンランドプロジェクト実行委員会【共催】山口市、山口県立大学【後援】山口商工会議所、山口商工会議所青年部。

⑤「KISHIN Artknit Exhibition in 周防国分寺」2021年4月29日（木）、5月1日（土）、5月3日（月）周防国分寺。

【主催】アトリエ・イマジネーション【後援】防府市、防府市教育委員会【特別協力】周防国分寺

⑥「The 20th Christmas Creation 2021『日はまた昇る』Exhibition」2021年12月10日（金）～12日（日）、KDDI維新ホール2階。

【主催】山口県立大学【企画・運営】山口県立大学国際文化学部文化創造学科【協力】クリスマス・フィンランドプロジェクト実行委員会、山口市、山口商工会議所、他。

4.「KISHIN Artknit Exhibition」 の背景および、概要とその成果

（1）背景（周防国分寺）

筆者の自宅は防府市の周防国分寺境内に位置し山門（仁王門）の西側に隣接している[注16]。従って県下でも貴重な史跡は筆者にとって幼少期の絶好の遊び場であり、思春期ではロマンティックに物想う場所であり、その後は癒しの空間として無くてはならない存在となっていた。現在は更地になってしまったが、かつて金堂南東には見事な松林があり、幼少期にはその中央に据えられた巨石に寝転がり、吹き抜けて来る風を感じつつ流れゆく雲を楽しんだものである。

そして約半世紀後の2010年、金堂や山門をはじめ境内の大樹のライトアップが企画された。このイベントは、故福山秀道僧正の発案と尽力によるものであり、現在も春と秋の2回開催されている。このイベント期間中の境内は実に神々しく、日常とは全くの異世界であった。山門の軒下の木組みは金色（こんじき）に照らされ、金堂の漆喰は夜空に白くくっきりと浮かび上がり、幻想的で荘厳な景が現れる。山門前を覆う2本の大楠（樹齢500年～600年）の幹は、天（あま）翔ける竜のようだと人々は称え、金堂西側の樹齢800年の欅は、まるでトトロの森の木のようだと子供たちは喜んだ。しかしこの美しいイベントはあまり周知されて

いなかった。そこで筆者は防府市の周防国分寺の建造物と大樹、山口市の徳地手漉き和紙を融合させて、この両市の地域資源を活用した展覧会を開催して、地域活性化の一助にならないかと考え始めた。確か2015年頃からであったと記憶している。しかし当時は「自身を奮い立たせる何か」に欠けていた様に思える。

やがて2020年、世界的なパンデミックが日本でも猛威を振るい、これまで経験した事のない日々が続いた。その時に思い出されたのが10年前の水谷教授の言葉、「様々な作家達が様々な形で地域に貢献している」であった。そこで早速、2021年の野外展覧会開催に向けての準備を開始した。

（2）概要

①展覧会のタイトル

「帰森」in 周防国分寺–徳地手漉き和紙と植物素材を用いたニットによる服飾造形と空間構成–

日程:2021年4月29日（木）、5月1日（土）、5月3日（月）の3日間

時間:18:30～21:00　※雨天中止

場所:山口県防府市 周防国分寺山門前（野外会場）

※観覧無料

主催:アトリエ イマジネーション

後援:防府市、防府市教育委員会

特別協力:周防国分寺

②コロナ禍を考慮した企画運営:

テレビ出演の見送りや、新聞各社への積極的な広報を控えて、集客数を抑え、会場の過密を避ける等の努力を行った。また来客への呼びかけ（マスクの着用、密集の回避、検温協力、連絡先の記入及び手指消毒の依頼、等）を行い感染予防に尽力した。

19.日没前

（3）成果

周防国分寺のライトアップされた仁王門や金堂、及び境内の巨樹景観や金堂内の仏像[注17]を紹介する事により、周防国分寺の新たな魅力を発信する事ができた。

徳地手漉き和紙を紹介する事により、佐波川の上流に脈々と受け継がれてきた文化を伝える事ができた。

来場者が独自の物語を想像できるような展示空間を設える事により、コロナ禍に於いても心豊かになれる幻想的な空間を提供する事ができた。

市内及び県内在住のアーティスト達に向け、文化財とアートをコラボレーションさせた、展覧会の可能性を提案し今後の展開を図る事ができた。

（4）成果の具体例 –その1–

①マスコミ関係:

山口新聞、令和3年4月30日（金）にて写真と記事の掲載

ほうふ日報、令和3年4月29日（木）にて写真と記事の掲載

『毛糸だま』（全国版）[注18]令和3年2月4日（木）にて作品画像とイベントの紹介

②入場者数:（受付2箇所に於ける記名用紙より算出）

4月29日　100名、5月1日　71名、5月3日　197名、合計　368名。

金堂拝観者数]

4月29日　42名、5月1日　52名、5月3日　121名、合計　215名。

（5）成果の具体例 –その2–（アンケート調査などから印象的なコメントを抜粋）

巨樹のように伸びてゆく力強さを感じました。自然と共に生きることを改めて考えさせられた時間でした。

素材（和紙）の可能性を感じることができる素晴らしい作品でした。

一瞬、シェークスピア劇の一場面を見ているようでした。

以前、和紙を使って衣服を作る勉強をしたこともあり、とても興味深い作品展でした。

仁王像の顔がもっとライトアップされると作品にも迫力がでたかな、という印象を受けました。

輪廻転生の「生→死→再生」の一場面を想像しました。

ファンタジーの場面、夜会に行く前のソワソワ、ワクワクしている恋人たちを想像しました。（10歳）

菩薩と神将、やさしさと強さ、作品から受けまし

た。

展示作品の数々は縄文時代の火焔土器を彷彿させますね。国分寺は、プリミティブな信仰の姿を今もなお伝えているはずです。ここは縄文時代の素朴な信仰と混同が許される空間ではないかと感じました。

9月からロンドンの芸術大学でファッション分野を学びます。（19歳）私も自分の言葉の代わりに作品が語る事の出来る作品を作りたいと、より一層強く思えました。（長文の為一部のみ記載）

（6）成果の具体例 –その3–

アンケート調査より、次年度（2022年）のイベント開催を希望するアーティストが9名、その中の2名に依頼。「帰森」から着想を得たギタリストのY.Yが「帰森」というタイトルのオリジナルギター曲を、詩人でロックシンガーのT.Oが『Return to The Forest』（英語版）を制作。この2名が各自のオリジナル作品と共に、翌年の2022年、春のライトアップ期間を活用して「音楽と詩の夕べ『帰森』～その後～」と題されたイベントを企画開催。2021年に引き続き、周防国分寺春のライトアップ期間のオープニングを華やかに演出した。

（7）成果の具体例–その4–

展覧会会場の画像を添付してこの研究の報告とする。

20.展覧会A画像（上）　21.展覧会B画像（下）

22.展覧会C画像（上）　　23.展覧会D画像（下）

5　おわりに

山口県立大学企画デザイン研究室では、研究室のプロジェクトとして徳地の地域活性化に取り組んだ。中でも徳地和紙を活用し、その魅力を広く伝えるために、研究室や研究室の大学院を修了した社会人とともに、山口県立美術館にて展覧会を行った。

また、フィンランド国立ラップランド大学との共同研究によるワークショップにも毎回持参して、フィンランドの地域資源であるトナカイの皮革や羊毛のフェストなどとの融合する徳地和紙や柳井縞などの作品を国際的な学生のグループによって制作した。本論で、その詳細は既に述べられている。

淺田陽子は、大学院に入る直前に実施した山口市のギャラリーラ・セーヌでの個展でニットの作品のインスタレーションの素材として、徳地和紙を用いていた。大学院に入り、偶然、研究室のプロジェクトと淺田本人の興味が一致していたことが、淺田と筆者との双方にとって幸運であったと思う。

淺田は大学院で制作した作品の「帰森」シリーズを完結させ、しかも、子供の頃から境内の一角に暮らしていた国分寺の門の前の空間でインスタレーションの方法で展示した。夜の展示では、効果的な光の表現がされて、境内は森の闇を感じさせた。そこに、ニットアートの巨大な作品が聳り立つ樹木の精を感じさせるものであった。和紙や自然素材の糸で編まれた作品は、まさにアートニットというにふさわしい迫力のある作品群であった。森の神様あるいは精霊と対話するような空間を見事に創造したことに敬意を払いたい。

当初、展覧会の装飾として使われていた和紙が、大学院入学から修了した現在までの間に、アートニットの作品で見事に融合され、精神世界を表現する領域へと昇華された。淺田のアートニットの真骨頂は、まさに有機的な形態にある。それゆえに、生命感が強く表現されている。

最後の集大成として実施したインスタレーションは、1980年代に毛利臣男がファッションの分野で切り開いた形式と繋がっている。毛利の舞台衣装、特にスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」におけるクマソタケル兄弟の衣装のもつ、現実味を超えたイメージは、淺田の作品にも通じるものがある。淺田は、自分の分野であるアートニットによる服飾造形で、着ることを超えた服飾の表現の可能性を具現化した。まさに、彼女はアーティストである。

（はじめにと5章おわりにを水谷が、1章から4章を淺田が執筆した）

謝辞

この研究は2011年、山口県立大学大学院入学と共に始まりました。そして遂行するに当たり多くの方々の協力を頂きました。

山口県立大学大学院の諸先生からは、様々な分野から地域貢献に関する専門的な技術や知識をご指導頂きました。また夏季特別実習に於いてご指導頂きました毛利臣男氏、フィンランド研修に於いてご指導頂きましたラップランド大学マルヤッタ - ヘイッキラ=ラスタス名誉教授からは、グローバルな視点からのクリエイティブなご指導を頂きました。そして企画デザイン研究室での活動に於いて協力を頂いた大学院生や学部生の皆様、山口ファッション&テキスタイル研究所の皆様に心よりお礼を申し上げます。

研究のフィールドとして多大なるご支援を頂いた、山口市徳地地域の皆様、徳地手漉き和紙保持者の千々松哲也氏とご子息の千々松友之氏に心よりお礼を申し上げます。

周防国分寺に於けるインスタレーションでは周防国分寺様、株式会社やの舞台美術の皆様、有限会社防府カラーの河合章夫氏、画廊as it is の皆様に多大なる協力を頂きました。

また、後援を頂いた防府市、防府市教育委員会、展覧会会場にお越し頂いた池田豊市長ほか多くの皆様に、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

注

1水谷由美子・松永美代子・木村和枝・淺田陽子・松原直子・武永佳奈・藤田幸司 共著「中山間地域活性化に向けた服飾デザインとアートマネジメント―『アウリンコ・徳地・タロ』プロジェクトを事例として―」『山口県立大学学術情報　第5号　大学院論集』山口県立大学、2012年、9-11頁。

2水谷由美子・淺田陽子・松原直子・武永佳奈・水津初美 共著「中山間地域活性化に向けた服飾デザインとアートマネジメント2―徳地手漉き和紙を用いたファッションショーとサンタクロース村での作品展開催による実践的研究―」『山口県立大学学術情報第6号　大学院論集』山口県立大学、2013年、11-12頁。

3水谷由美子、マルヤッタ・ヘイッキラ=ラスタス、松尾量子、パイヴィ・ラウタヨキ 共著 「山口県立大学とラップランド大学におけるデザイン教育プログラムの共同開発に関する研究 ― 二国間の地域資源を融合させる服飾デザインのワークショップの事

例について ― 」『山口県立大学学術情報 第6号』山口県立大学、2013年.119頁。
4前掲書『山口県立大学学術情報　第6号　大学院論集』、山口県立大学、23-27頁。
5柳澤桂子・堀文子共著『生きて死ぬ智慧』小学館、2004年、1-31頁、42-44頁。
6サンディー・ブラック 『ニットウエアーinファッション』　グラフィック社、2003年、6頁。
7世界各地の企業、デザイナー団体、大学などで構成する国際インダストリアルデザイン団体協議会（事務局カナダ）が、「デザインで都市の文化や経済を発展させ、生活の質を向上させている都市」を応募のあった都市から2年ごとに選定。期間中、デザイン関連の様々な催しが行なわれる。
（「サービスや働き方も変革」讀賣新聞、2012年2月17日。）
8水谷由美子『毛利臣男の劇的空間』繊研新聞社、2006年、134頁。
9前掲書『毛利臣男の劇的空間』繊研新聞社、20頁。
10前掲書『山口県立大学学術情報 第5号 大学院論集』山口県立大学、2012年、16-18頁、32頁。
11前掲書『山口県立大学学術情報 第5号 大学院論集』山口県立大学、2012年、21-22頁、34頁。
12前掲書『山口県立大学学術情報　第5号　大学院論集』、山口県立大学、2012年、22頁、35頁。
13前掲書『山口県立大学学術情報　第6号　大学院論集』山口県立大学、2013年、23-26頁。
14『国際服飾学会誌』No.61 2022　国際服飾学会、2022年、105頁。
15水谷由美子編著『Exhibition with 山口とくぢ和紙振興会結の香 「地域の宝もの『–徳地手漉き和紙と生活の装い–』展」山口県立大学、2014年。
16山口県立美術館編『平成大修理完成記念 周防国分寺展–歴史と美術–』山口県立美術館、2004年、7頁。
17前掲書『平成大修理完成記念周防国分寺展–歴史と美術–』山口県立美術館、2004年、15-36頁。
18日本ヴォーグ社編『毛糸だま』［春号］日本ヴォーグ社、2021年、イベント欄。

写真撮影者リスト、他

河合章夫	1・2・3・4・5・6・8・9・10・11・16・17・18・20・22・23
吉岡敬介	19・21
下尾周男	13（ロゴデザイン）
淺田陽子	7・12・14・15

別れの辞

本論は淺田陽子が退院後に自宅で終末治療を受けている間に、筆者と電話とメールでのやり取りをしながら執筆されたのもである。第1校は淺田本人も目を通すことができた。第2校を自分で見ると硬く言っていたが、2023年2月23日午前5時50分に防府市の医療法人実昌会プルメリアにて息をひきとった。享年61歳であった。

山口県立大学大学院国際文化学研究科での学びから約10年で「帰森」（淺田の造語で自然に帰るをテーマにしている）シリーズを周防国分寺の境内でのインスタレーションを通して完結した。そして、この遺稿の発行を待たずに自然に帰って逝った。

「清い人」という表現がふさわしい彼女は、命を削るようにして、丁寧にそして真摯に原稿を進めた。1日1、2時間ならなんとか椅子に座って仕事ができると言って、頑張られた。私はコロナ禍で会うことが許されないまま過ごし、2校を届けに行ってなんとか会いたいと思って連絡したが叶わなかった。

そして身内の方からの連絡で彼女が帰らぬ人になったことを知った。

この論考は彼女の遺作であり、アーティストとしての淺田陽子の生きざまを表すものになった。彼女は淡々と筆を進めているようだったが、「帰森」のテーマを改めて振り返りながら、自分の命について考えたに違いない。お医者さんから「年が越せる」と言われたと喜んでいた。彼女の作品制作、展覧会のディレクション、そして執筆などに挑む姿勢に私は尊敬を超えて畏敬の念さえ覚える。

淺田さんありがとう。そして安らかにお眠り下さい。

異例ではあるがお別れの辞を最後に記し、天国の淺田陽子に捧げたい。